

聖書：Ⅱサムエル7：1～29

説教題：あなたのために一つの家を

日時：2018年4月8日（夕拝）

この章でダビデは主のために家を建てたいと願います。1節にあるように、時は主が周囲のすべての敵からイスラエルを守り、安息を与えておられた時でした。戦いから解放されて、ふと振り返ってみるとどうだったでしょう。ダビデは自分の家に住んでいました。5章11節で見たように、ツロの王ヒラムが杉材、木工、石工を送って王宮を建ててくれたので、彼は立派な家に住んでいました。一方、6章でエルサレムへ迎え入れた神の箱は天幕の中にあるままです。これではいかにも申し訳ない。アンバランスです。そこで預言者ナタンに相談すると、ナタンは3節で「さあ、あなたの心にあることをみな行いなさい」と言います。そこでダビデは主の家を建てよう！と志します。

しかし、その夜のこと、主がナタンに現れて、それは御心でないと示されます。むしろ主は逆にダビデに偉大な約束をくださいます。その言葉が記されている5～16節は一般に「ダビデ契約」と呼ばれます。「契約」という言葉はここに出て来ませんが、他の箇所ではそう呼ばれています。詩篇89篇3～4節：「わたしは、わたしの選んだ者と契約を結び、わたしのしもべダビデに誓う。わたしは、あなたの裔をとこしえまでも堅く立て、あなたの王座を代々限りなく打ち立てる。」同じこのサムエル記第二23章5節でも、ダビデは今日の章の主の言葉を指して、「神が永遠の契約を私と立てられた」と言っています。神はこれまでアブラハムやモーセを通してご自身の契約を示して来られましたが、ここでその契約がさらに新しく、また明らかに示されています。ここに神がこの世界をどう導かれるのか、その御心が今までの契約に加える形で示されています。

まず今日、私たちが学ぶことができる一つ目のことは何でしょうか。それは神は私たちが何かをすることによって、それに応答する形で世界を導かれるのではないということです。神は受け身的に行動される方で、私たちが主導権を持っているというのではない。ダビデがここで主のために家を建てようとする、主はその必要がないと言われます。わたしはあなたがたに対して、その部族の一つにでも、「なぜ、あなたがたはわたしのために杉材の家を建てなかったのか」と言ったことがあろうかと。ここに私たちの神である主の驚くべきへり下りのお姿があります。主は本来、ご自身のためにすべてを要求しても良いお方です。聖なる栄光の神として光り輝く神殿をまず先に要求しても良

いお方です。しかしわたしはそのようにするようにと命じたことが一度でもあつただろうかと言われます。むしろ主は天幕でOKとされてきました。ご自身の民イスラエルのことを第一に考えられて、ご自身が低い立場に甘んじることを良しとして来られた。私たちの神はそのような方であることを見て、私たちはまず神の前にひれ伏して感謝すべきでしょう。

そして主はさらに驚くべきことを語られます。何と言っても今日の箇所ので特徴的なことは、ダビデが主のために家を建てたいと願ったところ、その願いは退けられ、かえって主ご自身がダビデのために家を建てると約束されたことです。ここにどんな意味があるのでしょうか。それは、主はこれからダビデの家を堅く立てて行かれますが、それはダビデがまず主の家を建てたことへの応答ではないということです。当時、異教の国々において、そのような考え方は一般的に見られたようです。まず王が自分たちの神のために立派な神殿を作る。それに神が応えてその国を祝福して下さる。神からすれば、王をはじめとする国民が立派な神殿を造ってくれたことを喜んで、その国を祝福するという構図です。一言で言えばギブアンドテイクの世界です。取り引きの世界です。ダビデは確かに取り引きをしようとしたわけではなく、ただ主に感謝して宮を造りたいと願っただけでしょう。しかしもし彼が宮を捧げて後、主が彼の家を堅くされたらどうでしょうか。「私が主の家を建てたから、主も私の家を堅くして下さった」とダビデが思うことにつながらないでしょうか。主はご自身とダビデの関係はそういう関係でないことを示すために、このように導かれたのです。ダビデが先で神がそれに応答するのではなく、神が先です。人によらず神が主権的に導いてくださる。そのことがこのダビデ契約に明らかに示されています。

ではその神の契約の内容はどういうものでしょうか。11 節に「主があなたのために一つの家を造る」と言われています。ダビデが主のために建てようとした家は、見える建物の家のことですが、主がダビデのために立てる家とは、前後関係を見れば分かる通り、建物ではなく、ダビデ「王家」を堅く立てるという意味です。ダビデ「王朝」を堅く立て祝福するということです。もちろんそれはイスラエル民全体の祝福のためです。その具体的な展開として主は 12 節でこう言われました。「あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。」 この「あなたの身から出る世継ぎの子」とは誰のことでしょうか。それはまずダビデの子ソロモンを指すでしょう。13 節に「彼はわた

しの名のために一つの家を建て」とありますが、ソロモンは後に主のための神殿を建てます。ダビデも I 歴代誌 22 章 9～10 節で、この約束がソロモンに当てはまることを述べています。しかしこれがソロモンに尽きるものでないことは明白です。なぜなら繰り返し「とこしえまでも」という言葉がここに出て来るからです。これはソロモンをはるかに超えるやがてのまことの王、メシヤの出現を約束する言葉でもあります。そこに至るまでには様々な紆余曲折があるでしょう。ダビデ、そしてソロモン以降の王たちの歩みを思うなら、それは決して芳しいものではありませんでした。14 節に王たちが罪を犯す可能性が示唆されていますが、実際にどんどん下降線をたどる状況となります。そしてついにバビロン捕囚が生じます。そのままでは「ダビデの家を堅く立てる」という主の約束は破棄されたかのようです。しかし主がここで述べていることは、だからと言ってわたしはこの約束を撤回したり、中止することはないということです。罪を犯したら懲らしめることはする。時には厳しくそうする。しかし 15 節にある通り、恵みを取り去ることはしない。あなたがたを捨てることはしない。必ず守る。そうしてついにまことのダビデの子を遣わす。すなわち私たちの主イエス・キリストです。その方こそが神の家を堅く立てるという約束を究極的に成就する王なのです。ここに神は世界の歴史をどのように導かれるのかが、これまでの契約に沿って、新たに示されています。それは神はただご自身の恵みによって導くということです。人がしたことへの応答としてではなく、ご自身の主権的計画と恵みをもって導く。そして特にダビデから出るまことの王を通して、その祝福を確立し、実現させる。ですからその方こそ歴史を解くカギとなる方です。このやがて来る王こそ全人類の希望です。その方こそ神の契約の焦点であるお方です。この方にあつて民を祝福することこそ、神が持つておられ、ここで明らかにされたご計画なのです。

さて、このように示された神のみこころに対する「私たちの応答」はどうあるべきでしょうか。そのことも私たちは今日の箇所から、特にダビデの姿から学ぶことができます。まず私たちに必要なことは、この神の約束によく聞くこと。この神の契約を良く知ることです。ダビデはこの主のことばを聞いて、それを知りました。驚くべき内容が言われています。自分が何かをしたからではなく、神が一方的な恵みをもって導いてくださる。自分たちの側での罪や失敗があつても、それにもかかわらず自分たちを導き、この約束を力強い御手をもって実現してくださる。そのことを知った時、ダビデから出てきたのは感謝であり、賛美でした。18～19 節：「ダビデ王は主の前に出て、座して言った。『神、主よ、私は何者でしょうか。私の家はいったい何なのでしょう。あなたが

私をここまで導いてくださったとは。神、主よ。このことがなお、あなたの御目には小さなことでしたのに、あなたはこのしもべの家にも、はるか先のことまで告げてくださいました。神、主よ、これが人に対するみおしえなのでしょうか。』」 神の契約とはこのようなものです。私たち人間は神の御前に取るに足りない者たちなのに、神は一方的な恵みによって、ここまでの計画を立ててくださった。そして21節にあるように「この大いなること」を知らせてくださる。そしてそれを実行してくださる。そして24節にある通り、こんな者たちの神となってくくださる。この神を見上げ、圧倒されて、ただただ御名を賛美し、感謝の賛美をささげるのみです。これが神の契約を真に知った人がまず示すべき応答です。

そしてダビデが示しているもう一つのことは25節以降の祈りです。彼の祈りの特徴は何でしょうか。それは25節にある通り、「あなたがお語りになったことばを、お語りになったとおりに行ってください」というものです。神の恵み深い約束を聞いて、そのあなたの約束とおりにしてくださいと改めて祈るのは図々しい姿でしょうか。そうではありません。実にこれこそ私たちの祈りの模範であると思います。27節でも29節でも、ダビデは主の約束を基礎とし、そこに立って祈りをささげています。一言でまとめれば、主のみことばに基づく祈りです。あなたが約束くださったとおりに、そのように事を行ってください、と祈る祈りです。その時、勇気を得て祈ることができるということが27節に示されています。「主の約束」が私たちの祈りに情熱と大胆さと確信を与えるのです。

長老教会の集まりの中でも、あの先生の祈りは素晴らしいな～と思わされることがたびたびあります。その先生が祈り始めると、その祈りは自由で、いつまでも祈れるようです。聞いていて、その言葉は力強く、心合わせていると、こちらが励まされて来ます。祈りのはずなのに、なぜか説教を聞いているかのよう。なぜそうなんだろうかと思って、ある時、注意して聞いて分かったことは、ただ「こうして下さい」「ああして下さい」というお願いばかりの祈りではないということでした。そうではなく、御言葉の約束に基づく祈りになっているということです。聖書の御言葉また約束を想起しながら、「あなたがこのように仰っているように、そのように私たちを導いて下さい」とか、「あなたがそうして下さいから感謝します」と祈っている。常に引用の形になっているわけではないのですが、背後に御言葉の約束があるのです。御言葉が言っていることを祈っているのです。ですから説教を聞いているようでもあるのです。そして私たちは

確かにそうだ！アーメン！と励まされながら唱和するのは。ヨハネの手紙第一 5 章 14 節：「何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるといこと、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。」 ですから祈りに関して大切なことは何か優れた言葉、優れた思想を自分で考えて主に申しあげることではなく、主の約束に心を止め、それを思い起こして、その通りに導いてくださいと祈ることだと思います。神は恵みによって、私たちに素晴らしい約束、契約を与えてくださっています。それを私たちは知り、感謝して、一つ一つ心に留めて、そのように行ってくださいと祈ればいいのです。そしてその祈りを通して、神の約束を信じる私たちの生活が導かれて行くべきなのです。

今日の私たちにとって、このダビデ契約はどういう意味があるのでしょうか。この時から 3000 年も後に生きている私たちは、この後の歴史を知ってさらに良くこの契約を理解できる位置にあります。神はダビデから出る世継ぎの子によって、その王国を堅く立てると言われましたが、この約束はイエス・キリストにおいて成就へと至りました。この約束の王は、この世へ送られ、十字架と復活を経て天に上げられ、今や父なる神の右の座、すなわち世界と宇宙の至高の座で、天と地の一切を支配しておられます。この王による支配は、今や全世界のあらゆる領域にまで広げられています。ここまでのことを見て知っている私たちは益々神の契約の真実さを確信して、いよいよその最終的実現を熱心に祈るべきではないでしょうか。この世界はこれからどう動いて行くのか、私たちは何も分からないのではないのです。神は昔からの契約によって導いておられます。ついに遣わしたダビデの子によって。その方は地上に現れ、決定的なみわざを成し遂げ、最終ゴールまであとわずかのところまで来ています。それまでなお神を信じる私たちには戦いがあり、困難があります。しかし神の約束は不変です。その成就是確実です。私たちは数千年前から示されて来たこの神の契約を心に留め、これに従って今日も導いておられる神に目を上げて、感謝して祈るべきではないでしょうか。あなたが約束くださった通り、あなたが最後まで導いてくださることを信じます。どうか、あなたの約束通りに行ってください！この契約に従って、あなたの御名が全世界であがめられますように。御国がいよいよ来ますように。御心が天で行なわれているように地でも行われますように！と。この神の約束を見上げて私たちも祈りたいと思います。そして勇気を得て、この神の契約の究極的な成就の日、救いの完成の日を待ち望み、その日に向かう歩みを主を賛美しつつささげて行きたいと思います。